

Title	巻頭言 : 社会とアレルギー
Author(s)	荻野, 敏
Citation	大阪大学看護学雑誌. 2008, 14(1)
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56870
rights	©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

社会とアレルギー

Society and an allergy

本誌の巻頭言としては、2年前に一度書いている。今回どういうわけか推薦された本誌の編集委員長という立場から執筆という次第になった。

テーマとしてあげた「社会とアレルギー」、これは本誌の発行時にはすでに終了しているが、平成20年の2月に大阪で私が担当する第26回日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会のメインテーマである。

喘息、アトピー性皮膚炎、花粉症などのアレルギー疾患の有症率は、医療機関を受診していない軽症者を含めればおそらく30%は超えていると思われる。つまり日本人の約3分の1がアレルギーを持っている。これほどの有症率になれば国民病といってもよく、自然治癒が極めて少ない現状を考えると、疾患を治療するより如何に仲良く付き合っていくべき疾患ともいえよう。社会としてみなで共有していく疾患であり、セルフケアが実際の日常社会においては重要とも考えられる。このような社会をつくるためには、医療関係者だけでなく、広く一般市民にも正しい知識を共有してもらわなければならない。そのような意味を含めて「社会とアレルギー」というテーマを考えた。

アレルギー疾患が増加している原因として多くのことが言われている。それらに関しては本誌の総説、巻頭言にも以前、書いたことがある。それらはすべて正しいが、また絶対的なものではない。少なくともその原因の一つとして、食生活の欧米化、肉食の増加は重要といえる。日本人には日本人に合った生活、食事、環境がある。そのゆがみがアレルギーの発症、増加に関係している。我々が教えてもらった西洋医学に対して、わが国には江戸時代以前から東洋医学が存在し、いわゆる漢の時代からの中医学から日本で発展した日本的な漢方医学がある。その基本的な考え、すなわちヒトと自然の関係を東洋医学では「ヒトは自然の一部」として認識して対処してきた。それに対し西洋医学では「ヒトが自然をコントロール」してきたともいえる。自然を環境と置き換えても良い。どちらが好ましいかは個人により異なり、また時代によっても異なるだろう。私個人としてはこのヒトと自然（環境）との関係のゆがみがアレルギー疾患の増加に関係している気がしてならない。

早急に結論を出せる問題ではないが、このような関連を考え、対処していくこともアレルギー疾患の制圧に対して有用ではないかと考えている今日この頃である。

大阪大学大学院医学系研究科
保健学専攻 統合保健看護科学分野
看護実践開発科学講座(成人・老人看護学)
荻野 敏